

今年は何年ですか？

内田 慶市(関西大学教授)

日本語の場合、「今年は何年でした？」とか「今年は西暦何年？」という発話は、(少なくとも)私の語感では「変」ではないように思われる。ところが、これを中国語で言うとうどうなるか？実はこれが結構、面倒なのである。何人かの中国人に聞いてみると、

1. 今年一九九几年？
2. 今年一九九几年？
3. 今年几几年？
4. 今年公历几几年？

などの答えが返ってくる。しかし、今年はまだ2000年に入ってるから、1.と2.はおかしい感じがする。結局は3.とか4.とかになるのであろうが、中国人はこれらの答えを返すときに少し戸惑った様子を見せるのである。どうやら、「さっと」答えが出るような発話ではないようなのだ。「そんな質問をするはずがない」とか「今年が何年か知らないことはあり得ない」などと言う中国人も現に存在する。よくよく考えると確かに「今年が何年か」は誰でも知っていることかも知れないが、日本語ではそれほどおかしな文ではないと思うのだが、皆さんは如何でしょう？

しかしながら、「日本語にはあって中国語にはない」表現、「日本語にはあって英語にはない」表現、当然、その逆もあるわけであるが、このようなことは言語表現には本当はよくあることなのである。

私は一昨年、仕事の関係でアメリカに1年ほど滞在していたが、ホームステイ先でよくこういうことに出くわした。

以下はその一例で、ホストマザーのバーバラさんを囲んでの夕食の時の会話である。(拙著「ハーバード電脳日記ーミセス・バーバラとの出会い」同出版社より)

私 : 明日はtomorrowですね。では、あさっては？

バーバラ : あさっては、木曜だ。

私 : いや、そうじゃなくて、今日、明日ときて「あさって」はどう言いますか？

バーバラ : the day after tomorrowだ。

私 : そうですね。じゃ、その次はどう言いますか？(つまり「しあさって」ということ)

バーバラ : today, tomorrow, the day after tomorrow, this Fridayだ。

私 : いや、今日が火曜日だとは知らなかった場合には、そう言えないでしょう？

バーバラ : だから, tomorrow, the day after tomorrow, そしたら次はthis Friday, this Saturdayとなるんだ。

私 : ?? (おいおい、そこに戻るなよ)

何度聞いても同じ答えで、しまいには「今日が火曜日って知らないなんて、お前はCrazyだ！」と言われる始末である。同じ家でホームステイをしている台湾の学生が、「中国語には大后天ということばがあるんですが、英語にはないの？」と応援してくれるが、「ここはアメリカだ、そんなことばはない！」でおしまい。別のブラジルの学生も「ポルトガル語にもないです」と言う。なるほど、よく考えてみると確かにそういうことがあるのだと痛感した次第である。

以前にどこかで書いたことがあるが、日本語だと「昨日は何時まで起きていましたか?」というところを中国語では、「昨天你几点睡觉?」とかしか言えない。「郵便局は何時まで開いていますか?」も同様に中国語では普通には「邮局几点关门?」とかになるようである。つまり「起きていたか」ではなくて「寝たか」であり、「開いているか」ではなくて「閉まるか」になるわけである。「この本はありませんか?」が、「有这本书吗?」となるのも同じような現象であろう。日本語は「～ないですか?」と否定疑問を使うところを中国語ではそうではないという場合である。

ことばを習得するというのは、そういうことである。単に発音や文法をマスターしただけでは本当は不十分なのである。それは言語習得のほんの「半分」でしかない。もちろん、良い発音、正しい文法は最低必要条件であるが、それだけではそのことばを「我がもの」としたことにはならないのである。

ある脳神経外科の専門家によれば、正しい発音や基本的な文法、文型は、3ヶ月でマスターできるそうである。ネイティブの発音をテープなどで、毎日「繰り返し聞いてそのままオウム返して発音する」という訓練をすればそれは可能になるそうである。(拙稿「中国語の学び方」『中国語の環』第51号、中国語検定協会編参照)問題はその後である。

これもアメリカ滞在中の体験であるが、アメリカの図書館では利用者はカバンを持ったままで書庫に入ることができる。自分で書庫に入って、欲しい本を探すのであるが、図書館から出るときには必ずカバンのチェックを受けることになる。その時に係の人が「No library's book?(図書館の本はありませんね?)」とか聞くのであるが、その答えでいつも失敗していた。ここを「Yes(はい)」とやるのである。否定疑問の答え方であるが、頭では、こういう場合は「No(いいえ)」と理解しているつもりでも、とっさの場合は、悲しいかな日本人である。「Noと言えない日本人」に成り下がってしまうのである。

言語はその民族の文化(歴史、思想等)を反映したものである。その民族の「ものの見方・考え方」が言語の背景には存在する。そのことを言語を学ぼうとする人も、それを教える人も考えておく必要がある。すなわち「異文化理解」ということである。特に、すでに自分の言語が確立している人が、他の言語を学ぶ時は、このことが重要になってくる。「違い」を意識しながら学習していくのである。先に述べた「繰り返し聞いて、オウム返しに発音する」というのは、幼児の言語習得の方法であるが、その基盤の上に、「この国の言語」と「かの国の言語」を対照させて学習していくのである。そして、この2つの方法は、「あれかこれか」ではなくて、実は「あれもこれも」であることを念頭に置くべきである。

私はここ数年、「近代における東西の言語文化接触」を主な研究テーマとしているが、特にマテオ・リッチ以来のヨーロッパの宣教師達の中国語教本を見ていると、彼らの中国語教育の方法とは、まさにこの2つの方法を統合したものであるように感じている。彼らはキリスト教布教という大目的のためには、自らの文化をも中国に「同化」させようとした痕跡が見られる。「ヘラクレス」は“佛陀”に、「ダイアナ」は“嫦娥”にも変えるのである。(イソップの翻訳の例)そして、その中国語教本の集大成として、Wadeの「語言自選集」やMateerの「官話類編」があるのであるが、これらは現在の中国語学習者、研究者が読んでも十二分に価値のあるものである。恐らく、これらの教本を凌ぐものは今に至るまで世界に存在しないと書いても過言ではない。一読をお薦めして本稿のまとめとする。